

連珠っておもしろい

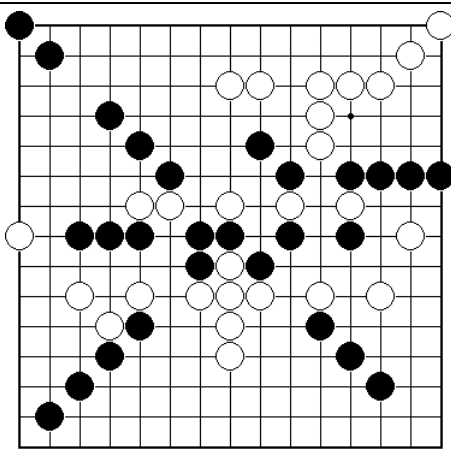
九段 河村典彦

● 第126回 ●

■詰連珠ドリル ③

詰連珠ドリルのネタで3回連続になってしまいが、最近ドリル作成に注力しており、今回もここから書いてみたい。

まずは一手で五連を探す手の問題をやってもらおう。黒先で五連になる一手を見つけるのだが、結構難しい。

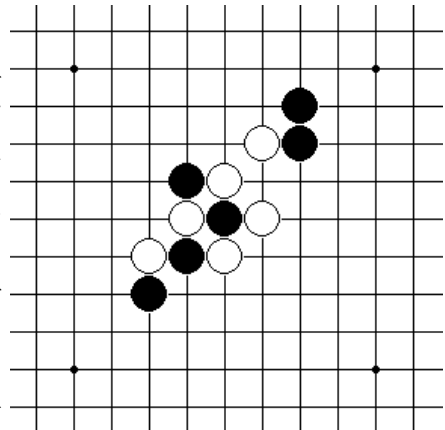


珠友の読者であれば当然わかるだろうが、長連の認識が必要で、斜めの筋が見えづらいので、初心者の方には難しいだろう。もともとは千木良七段が主催している連珠教室でこういうような問題をドリルにして小学生にやってみたらとこ

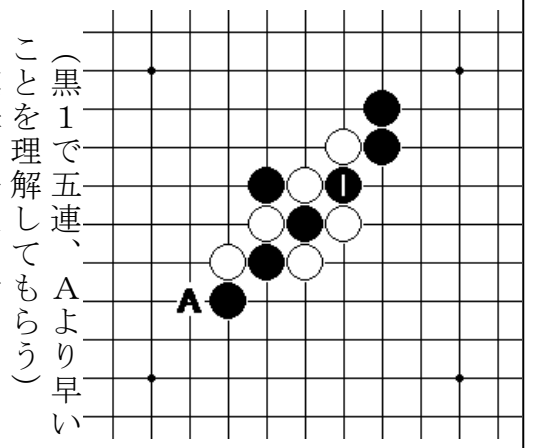
ろ、食いつきがいいので問題集として準備したという経緯がある。今回私が入門編、初級編、中級編、上級編を、千木良さんの方で初心者編を各2冊出版し、合計10冊（各100問、1冊定価200円）作った。まさに自費出版で一般には流通していないのだが、連珠関係者に配っているので大会の賞品などで使われると思っている。（もし購入したい方は私に直接連絡ください）

さて、初心者編はまさに初心者の方に向けたドリルなので、そういう問題を作るためには初心者の方に見える方、考え方を理解する必

要がある。例えば次の問題を見てみよう。



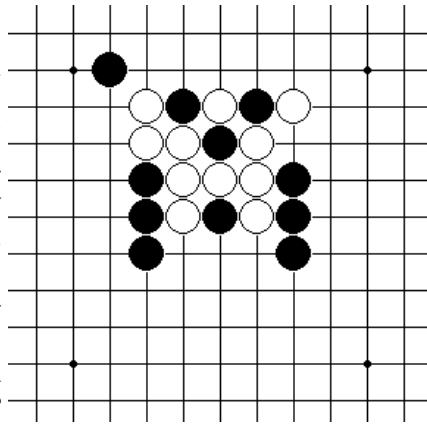
黒で次にどう打ちますか？と言うように伝えると、多くの方は斜めのトビ四が見えないので白の四を止めてくる。次の段階で、「いや、もっといい手がありますよ。次の一手で五になります」と言うヒントを出す。何とか五が見えてくる。ここで躓くとその次になかなか進めないのだが、実際には見えない人が多い。小学生低学年でも理解が早い子もいるし、親の方がわからない場合もある。



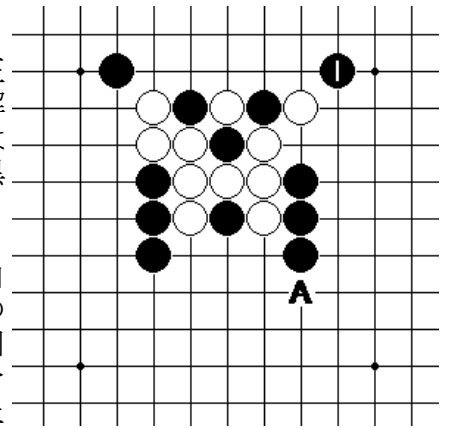
（黒1で五連、Aより早いことを理解してもらおう）

連珠の普及を考えると、初心者の方への見え方までこちらが下がる必要があり、上から目線だと教えられる方は嫌になってしまう。こういうレベルの方に四迫いや難しい詰連珠をやってもらってもあきらめてしまうだけなので、最初にレベルを見極めて適切な対応を取る必要がある。ただ、ドリルを問題集としておけば、手の空いた時にできるし、わからなくても答えを見ながら勉強でき

る。理想はドリルだけの勉強で初段レベルまでなってもらおうのだが、これはあくまで補助教材で、実戦や動画などを組み合わせていく必要があるだろう。

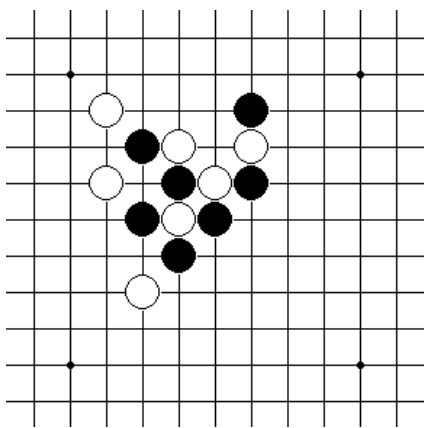


次のレベルは相手の三や四をちゃんと止めるということになる。これも黒先で次の一手は？という出し方になるが、五を見つけたよりはかた難しくなる。三と四のスピードの違いを理解してもらおうのが主眼である。この問題も白の四を見つけるところができるかがポイントとなる。

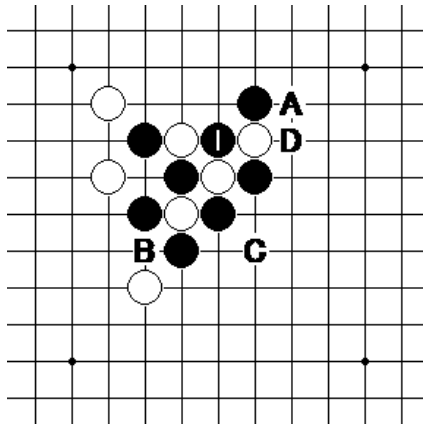


正解は黒1と白の四を止める手になる。黒Aも打ちたいが、白1で五になってしまう。

次は自分の三と相手の三の速度の問題となる。



これも黒から打って勝つてくたさいと言ってもなかなか黒の三に気が付かない我々が思っている以上に斜めは見えないと思つた方がよい。なので基本的にドリルは斜めの筋を使うようにしている。



正解は黒1と打つ手なのだが、AやBに止める人やCやDで攻める人が多い。この時にどうやって1に気づかせるかが指導のテクニクでもある。相手の集中力を切らさないよう、でもできるだけ教えすぎないようにするのがいいのだが、

現実には難しい。上級者に教えるよりも初心者に教える方が何倍も難しいのは、相手がどのぐらいのレベルかがこちらにはわからないからである。

最初に出題した問題の回答は次の黒1である。盤隅に打つ手にしたのだが、こんな場所では通常は使うことではないのであくまで客寄せ用である。一番いいのは初心者を指導してその人が次の初心者に教えるシステムを作るのだと思うので、その環境を作るのが次の目標になる。

